

## 図書 紹介

### 悪魔の感染症

著者：大利昌久（おおり医院）

発行：榊悠飛社／〒165-0034 東京都中野区大和町 1-67-6／Tel.03-5327-6051(編集部)／

四六判／271 頁／価格 1800 円(税別)／2011 年 12 月 21 日発行

著者は、アフリカ、中近東、アジアの国々を回り、日本脳炎、ペスト、天然痘、エイズ、狂牛病、マラリア、SARS などの感染症の診療にあたり、「海外医療のパイオニア」あるいは「日本渡航医学会の生みの親」と呼ばれている。本書では、人々の命を悪魔のように奪っていった感染症について著者の海外で失敗や事件を通してその歴史と恐ろしさ語ったドキュメントである。

#### 第 1 章 悪魔の感染症

#### 第 2 章 パリからインド 15000km

#### 第 3 章 アフリカの日々

#### 第 4 章 熱帯病の中で

#### 第 5 章 国境を越えて

#### 第 6 章 謎の肺炎「SARS」を追って

#### 第 7 章 様々な感染症を診る

#### 第 8 章 海外渡航と感染症

サブタイトルは、第 1 章では、満州開拓民を襲った出血熱、ハンタウイルスの恐怖、炭疽菌テロ、黒死病ーペスト、地球から消えた?ー天然痘、人類を滅ぼすーエイズ、常識をこえたプリオン病ー狂牛病、人類のおごりー耐性菌の出現などである。第 2 章では、人生を変えた旅のはじまり、タランチュラ狩、外務省ーケニアへの赴任など、第 3 章では、ケニアの初日、野外授業、野菜売りの子供たち、野口英世の悲劇などである。第 4 章では、熱帯病、コレラ、ライ病ー母子感染、マラリアの症状、ツエツエバエによる睡眠病、飢餓難民を襲う感染症などである。第 5 章では、マラリア事件、重症患者の緊迫した対応、タンザニア・ウガンダ戦争などである。第 6 章では、SARS との関わり、SARS 流行中の中国（上海→北京）、SARS の初発患者が入院した仏山第一病院へ、トリ由来インフルエンザ（H5N1）の登場と SARS の教訓、ブタ由来インフルエンザ（H1N1）などである。第 7 章では、感染症新時代、地球温暖化で増える感染症、デング熱・デング出血熱、パナマ運河の悲劇ー黄

熱病、狂犬病—その知られざる実態、致命率の極めて高い破傷風、ロタウイルスとノロウイルス感染、腸管出血性大腸菌、とんでもない寄生虫、偶然の発見—ピロリ菌などである。第8章では、輸入感染症、旅行者下痢、海外渡航者の腸内感染、性感染症、クラミジア感染症、虫刺症の洗礼、ワクチンの話、遅れた日本の「旅行医学」などである。

人類を滅ぼす—エイズ(第1章)では、「米国の遺伝子操作による微生物兵器」説について記述がある。それによると新型ウイルスを受刑者に接種した人体実験では「毒性が弱く、軍事利用には適さない」と判断され(潜伏期間が1年以上もあり)、発病する前に無罪放免になった囚人が収容所生活で身に付けた同性愛によって拡大していったという。遺伝子工学技術は今やわずかの器具を用いれば、高校生でもでき、微生物兵器製造に使うことも難しくなく、テロへの悪用の懸念もされる。2012年1月20日、日米欧などの科学者39名が強毒性の鳥以下フルエンザウイルス「H5N1」に関する研究を自主的に60日間停止する声明を「サイエンス」と「ネイチャー」に共同で発表した。「生物テロに悪用される」との懸念から両誌が論文の掲載を見合わせる事態となり、研究とテロ防止をめぐって論争となっている。

新しい感染症の登場は、グローバル化による人やモノの大量移動、急速な開発や人口増加に伴う都市化、森林や都市開発による環境破壊の進行などを背景に、「未知の感染症」が人前に現れきたと考えられ、著者はこれをひとえに「人間のおごり」からきていると述べている。

本書は著者の感染症との死闘を綴っている。その強靱な肉体と確固たる精神力には頭の下がる思いである。(学会事務局)